

「びん沼川環境まつり」と新河岸川景観づくり事業を支えるのは、新河岸川広域景観づくり連絡会の代表を務める小杉武・NPOゆめつるせ代表理事と、運営委員を務める武田侃蔵（かわごえ環境ネット）、友國洋（和光まちづくりNPOセンター）、堀江肇（舟運・ふじみんの郷）、相川仁男（あいがも会）、山本長志郎（わくわく新河岸川みどりの会）らだ。特に、副代表としてびん沼川の活動に参加、現在は会長を務める堀江肇さんは、ふじみ野市に復元された福岡河岸周辺の環境の維持管理を請け負う「舟運・ふじみんの郷」の会長も務めている。堀江さんに地域活動へ取り組む思いをお聞きした。

新河岸川・福岡河岸周辺の環境を守る

舟運・ふじみんの郷 堀江肇さん

—「舟運・ふじみんの郷」とはどのような組織なのか。

堀江 舟運・ふじみんの郷は任意団体です。傘下に自治会、商店会、ボランティア団体、大学、高校など11団体があり、それをまとめています。

—何をするための組織ですか。

堀江 県の「水辺再生プラン」事業として、市内の新河岸川の養老橋付近に船着場が復元され、遊歩道も整備されました。この事業を受け継ぎ、施設を維持管理するのが目的です。県の「彩の国リバーサポート（川の国広域連携）」として指定され、2012年の4月に県

と市との間で3者協定を結び発足しました。

—実際、どんな活動を。

堀江 人を動員して川の美化、ゴミ拾いを3月と11月の年2回と、毎月草刈りを行っています。それと、植栽今回はからし菜の種をまきました。

—何名くらいでゴミ拾いをするのですか。

堀江 自治会も、全部ではなく、賛同してくれるところだけです。だいたい130から140名くらいです。草刈りは普段は私と2、3人で。武蔵野銀行の基金からの補助を利用して



堀江さん

—舟運・道の会」も「舟運・ふじみんの郷」のメンバーとして参加しているわけですか。

堀江 夏に新河岸川で灯篍流しをされているのですが、これも「舟運・道の会」がされているのです。

堀江 北部振興会という商店会が主体です。私はその商店会の会長もしています。ただ市役所からもっと広くまとめてほしいと言われ、今は実行委員会を組織して

堀江 ロードサポートと言って、市内のレストラン・デニーズから川崎橋、川崎交差点から養老橋までの道路を年4回掃除しています。最初は行政が作ったのですが、その後は独立した花壇を造ったり、自主的にいろいろなことをやっています。

います。以前は川崎橋のたもとでやっていたのですが、船着場ができたので今年から養老橋に移しました。

―びん沼にはどのように関わっているのですか。

堀江 「舟運・ふじみんの郷」は、川のサポーターです。びん沼川も新河岸川の支流なので関係してくるわけですね。また、県の新河岸川広域景観づくり連絡会に参加、今副代表をしています。その関係で、「びん沼川環境まつり」にも毎年参



水辺再生記念式典 (2012年4月)

加しています。

―「舟運・ふじみんの郷」活動の手ごたえはどうですか。

堀江 まだまだ広がっているとは言えないですが、2年目で新河岸川の環境の保全のためこれだけのことをやっているのですから、県や市からは感謝されていると思います。

周辺地域でも、ボランティアがこれだけ働いているところはないと思います。

―福岡河岸付近は歴史あり、自然も豊か

でよいところですね。

堀江 ふじみ野市側が福岡河岸、対岸の川越市側は古市場河岸の跡です。東京・日本橋から舟で来て荷を積み下ろした。吉野屋という舟問屋の建物も残っていますし、今の福岡河岸記念館も東上線の誘

致に一役買った星野仙蔵の実家の舟問屋の跡です。河岸記念館の3階建ての建物に上るとスカイツリーが見えます。水辺には沢ガニもいます。

―堀江さんは今おいくつですか。

堀江 68歳です。

―お仕事は。

堀江 元々ガソリンスタンドを経営していました。生まれは毛呂山で、父が産婦人科の医院を上福岡に開業して移ってきたのですが、



復元された船着場

父が亡くなったので、始めました。今はスタンドを閉めています。商売はへたくそですから。

―地域にここまで打ち込むようになったのは。

堀江 何ででしょうかね。地域のひととのコミュニケーションが好きだったということかな。肌が合わなければ逃げてしまいます。まわりの人が協力してくれています。



福岡河岸記念館